

安宅

観世小次郎作

ワキ 富樫某

狂言 富樫従者

シテ 武蔵坊弁慶

ツレ九人 同行山伏

子方 判官義経

狂言 強力

地は 加賀

季は 秋

ワキ詞

「かやうに候ふ者は。加賀の国富樫の何某にて候。

さても頼朝義経御中不和にならせ給ふにより。判
官殿十二人の作り山伏と為つて。奥へ御下向の由
頼朝きこしめし及ばれ。国々に新聞を立てゝ。山
伏をかたく撰び申せとの御事にて候。さる間此所
をば某承つて山伏を留め申し候。今日も堅く申し
付けばやと存じ候。如何に誰かある。

狂言

「御前に候。

ワキ

「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申し候へ。

狂言

「畏つて候。

山伏次第

「旅の衣は篠懸の。く。露けき袖やしをるらん。

サシ

「鴻門楯破れ都の外の旅衣。日も遙々の越路の末。

おもひやるこそ遥なれ。

シテ

「さて御供の人々には。

山伏

「伊勢の三郎駿河の次郎。片岡増尾常陸坊。

シテ

「弁慶は先達の姿となりて。

山伏

「主従以上十二人。いまだ習はぬ旅姿。袖の篠懸露霜を。今日分けそめていつまでの。限りもいさや白雪の。越路の春に急ぐなり。

上歌

「時しも頃は二月の。く。十日の夜。月の都を立ち出で。是やこの。行くも帰るも別れては。く。知るも知らぬも逢坂の。山隠す。霞ぞ春は恨めしき。く。

下歌

「波路遥に行く舟の。く。海津の浦に着きにけり。

上歌

東雲はやく明け行けば。浅茅色づく有乳山。

「氣比の海。宮居久しき神垣や。松の木芽山。なほ行くさきに見えたるは。杣山人の板取。河瀬の水の浅洲津や。末は三国の湊なる。蘆の篠原波よせて。靡く嵐の烈しきは。花の安宅に着きにけり。く。

シテ詞

「御急ぎ候ふ程に。是は早安宅の湊に御着きにて候。暫く此所に御休みあらうずるにて候。

判官詞 「如何に弁慶。

シテ 「御前に候。

判官 「唯今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。

シテ 「いや何とも承らず候。

判官 「安宅の湊に新関を立てゝ。山伏を堅く撰ぶところ
申しつれ。

シテ 「言語道断の御事にて候ふ物かな。さては御下向を
存じて立てたる関と存じ候。是はゆゝしき御大事

にて候。まづ此傍にて暫く御談合あらうずるにて
候。

ツレ 「我等が心中には何程の事の候ふべき。唯打ち破つ
て御通りあれかしと存じ候。

シテ 「暫く。仰せの如く此関一所打ち破つて御通りあら
うずるは易き事にて候へども。御出で候はんずる
行末が御大事にて候。唯何ともして無異の義が然
るべからうずると存じ候。

判官 「ともかくも弁慶はからひ候へ。

シテ 「畏つて候。 某急度案じ出だしたる事の候。 我等を始めて皆々につくい山伏にて候ふが。 何と申しても御姿隠れ御座なく候ふ間。 此まゝにては如何と存じ候。 恐れ多き申事にて候へども。 御篠懸をのけられ。 あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ。 御笠を深々と召され。 如何にもくたびれたる御体にて。 我等より跡に引きさがつて御通り候

はゞ。 中々人は思ひもより申すまじきと存じ候。

判官 「實に是は尤にて候。 さらば篠懸を取り候へ。

シテ 「畏つて候。 如何に強力。

狂言 「御前に候。

シテ 「笈を持ちて来り候へ。

狂言 「畏つて候。

シテ 「汝が笈を御肩に置かるゝ事は。 なんぼう冥加もなき事にてはなきか。 先汝は先へ行き関の様体を見

て。誠に山伏を撰ぶか。又左様にもなきか懇に見て来り候へ。

狂言
「シカシカ。」

シテ
「さらば御立あらうずるにて候。実にや紅は園生に植ゑても隠れなし。」

山伏
「強力にはよも目を懸けじと。御篠懸を脱ぎ替へて。麻の衣を御身にまとひ。」

シテ
「あの強力が負ひたる笈を。」

判官
「義経取つて肩に懸け。」

山伏
「笈の上には雨皮形箱取り付けて。」

判官
「綾菅笠にて顔をかくし。」

山伏
「金剛杖にすがり。」

判官
「足痛げなる強力にて。」

地
「よろ／＼として歩み給ふ。御ありさまぞ痛はしき。」

シテ詞
「我等より跡に引き下つて御出あらうずるにて候。さらば皆々御通り候へ。」

山伏「承り候。

狂言「如何に申し候。山伏達の大勢御通り候。

ワキ詞

「何と山伏の御通りあると申すか心得である。なふ

く客僧達是は関にて候。

シテ

「承り候。是は南都東大寺建立の為に。国々へ客僧を遣はされ候。北陸道をば此客僧承つて罷り通り候。先勧めに御入り候へ。

ワキ

「近頃殊勝に候。勧めには参らうずるにて候ふ去り

ながら。是は山伏達に限つて留め申す関にて候。

シテ

「さて其謂は候。

ワキ

「さん候頼朝義経御中不和にならせ給ふにより。判官殿は奥秀衡を頼み給ひ。十二人の作り山伏となつて。御下向の由其聞え候ふ間。国々に新関を立て。山伏をかたく撰び申せとの御事にて候。さる間此所をば某承つて山伏を留め申し候。殊に是大勢御座候ふ間。一人も通し申すまじく候。

シテ「委細承り候。それは作り山伏をこそ留めよと仰せ
出だされ候ひつらめ。よも誠の山伏を留めよとは
仰せられ候ふまじ。

狂言「いや昨日も山伏を三人まで切つたる上は。

シテ「さて其切つたる山伏は判官殿か。

ワキ「あらむつかしや問答は無益。一人も通し申すまじ
い上は候。

シテ「さては我等をも是にて誅せられ候はんずるな。

ワキ「中々の事。

シテ「言語道断かゝる不祥なる所へ来かゝつて候ふものか
な。此上は力及ばぬ事。さらば最期の勤めを始め
て。尋常に誅せられうずるにて候。皆々近う渡り
候へ。

シテ「いでく最期の勤めを始めん。夫れ山伏といつば。
役の優婆塞の行義を受け。

ツレ「其身は不動明王の尊容をかたどり。

シテ「兜巾といつぱ五智の宝冠なり。

山伏「十二因縁のひだをすゑて戴き。

シテ「九会曼荼羅の柿の篠懸。

山伏「胎蔵黒色のはゞきをはき。

シテ「さて又八目の草鞋は。

山伏「八葉の蓮華を踏まへたり。

シテ「出で入る息にあうんの二字を称へ。

山伏「即心即仏の山伏を。

シテ「こゝにて討ちとめ給はん事。

山伏「明王の照覧はかりがたう。

シテ「熊野権現の御罰を当らん事。

山伏「立ちどころにおいて。

シテ「疑あるべからず。

地「俺阿毘羅咩欠と。数珠さらくと押しもめば。

ワキ詞「近頃殊勝に候。先に承り候ひつるは。南都東大寺
の勧進と仰せ候ふ間。定めて勧進帳の御座なき事

は候ふまじ。勸進帳を遊ばされ候へ。是にて聴聞申さうずるにて候。

シテ「何と勸進帳を読めと候ふや。

ワキ「中々の事。

シテ「心得申して候。

シテ詞「もとより勸進帳はあらばこそ。笈の中より往来の巻物一卷取り出だし。勸進帳と名付けつゝ。高らかにこそ読み上げゝれ。夫れつらく。

地「惟ん見れば。大恩教主の秋の月は。涅槃の雲に隠れ。生死長夜の長き夢。驚かすべき人もなし。こゝに中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝と名付け奉り。最愛の夫人に別れ。恋慕やみがたく。涕泣眼に荒く。涙玉を貫く。思ひを善途に翻して。廬遮那仏を建立す。かほどの霊場の。絶えなん事を悲しみて。俊乗坊重源諸国を勸進す。一紙半銭の奉財の輩は。此世にては無比の樂に誇り。当来

にては。数千蓮華の上に座せん。帰命稽首敬つて
白すと。天も響けと読み上げたり。

ワキ 「関の人々肝を消し。

地 「恐れをなして通しけり。く。

ワキ詞 「急いで御通り候へ。

シテ詞 「承り候。

狂言 「如何に申し上げ候。判官殿の御通り候。

ワキ詞 「如何に是なる強力とまれところぞ。

山伏 「すは我君をあやしむるは。一期の浮沈極まりぬと。

皆一同に立ち帰る。

シテ詞 「あゝ暫く。あわてゝ事を仕損ずな。やあ何とてあ

の強力は通らぬぞ。

ワキ 「あれは此方より留めて候。

シテ 「それは何とて御とめ候ふぞ。

ワキ 「あの強力がちと人に似たると申す者の候ふ程に。

さて留めて候ふよ。

シテ「何と人が人に似たるとは。めづらしからぬ仰せにて候。さて誰に似て候ふぞ。

ワキ「判官殿に似たると申す者の候ふ程に。落居の間留めて候。

シテ「や。言語道断。判官殿に似申したる強力めは一期の思出な。腹立や日高くは。能登の国まで差さうずると思ひつるに。わづかの笈負うて跡に下ればこそ人も怪しむれ。総じて此程。につくしにくし

と思ひつるに。いで物見せてくれんとて。金剛杖をおつ取つて散々に打擲す通れところぞ。や。笈に目を懸け給ふは。盗人ざふな。

地「かたぐはは何故に。く。かほど賤しき強力に。

太刀刀ぬき給ふは。めだれ顔の振舞は。臆病の至りかと。十一人の山伏は。打刀ぬきかけて。勇みかゝれる有様は。如何なる天魔鬼神も。恐れつべうぞ見えたる。

ワキ詞

「近頃誤りて候。はや／＼御通り候へ。」

シテ詞

「先の関をば早抜群に程隔たりて候ふ間。此所に暫く御休みあらうずるにて候。皆々近う御参り候へ。如何に申し上げ候。さても唯今は余りに難義に候ひし程に。不思議の働きを仕り候ふ事。是と申すに君の御運尽きさせ給ふにより。今弁慶が杖にも当らせ給ふと思へば。いよくあさましくこそ候へ。」

判官詞

「さては悪しくも心得ぬと存ず。如何に弁慶。さても唯今の機転更に凡慮より為すわざに非ず。唯天の御加護とこそ思へ。関の者ども我を怪しめ。生害限り有りつる処に。とかくの是非をばもんだはずして。唯真の下人の如く。散々に打つて我を助くる。是れ弁慶が謀に非ず八幡の。」

地

「御託宣かと思へば。忝くぞ覚ゆる。」

地クリ

「夫れ世は末世に及ぶといへども。日月はいまだ地

に落ち給はず。たとひ如何なる方便なりとも。正しき主君を打つ杖の。天罰に当らぬ事や有るべき。

判官サシ

「実にや現在の果を見て。過去未来を知ると云ふ事。

地

「今に知られて身の上に。憂き年月の二月や。下の十日の今日の難を。のがれつるこそ不思議なれ。

判官

「唯さながらに十余人。

地

「夢の覚めたる心地して。互に面を合はせつゝ。泣くばかりなる有様かな。

クセ

「然るに義経。弓馬の家に生れ来て。命を頼朝に奉り。屍を西海の波に沈め。山野海岸に。起き臥し明かす武士の。鎧の袖枕。かたしく隙も波の上。ある時は舟に浮び。風波に身を任せ。ある時は山脊の。馬蹄も見えぬ雪の内に。海少しある夕波の。立ちくる音や須磨明石の。とかく三年の程もなく。敵を亡ぼし靡く世の。其忠勤も徒に。なりはつる此身の。そも何といへる因果ぞや。

判官

「実にや思ふ事。叶はねばこそ憂き世なれと。」

地

「知れどもさすがなほ。思ひ返せば梓弓の。すぐなる人は苦しみて。讒臣は弥増に世に在りて。遼遠東南の雲を起し。西北の雪霜に。責められ埋る憂き身を。ことわり給ふべきなるに。唯世には。神も仏もましまさぬかや。恨めしの憂き世や。あら恨めしの憂き世や。」

ワキ詞

「如何に誰かある。」

狂言

「御前に候。」

ワキ

「さても山伏達に聊爾を申して。余りに面目もなく候ふ程に。追っ付き申し酒を一つ参らせうずるにてあるぞ。汝は先へ行きて留め申し候へ。」

狂言

「畏つて候。如何に申し候。先には聊爾を申し余りに面目もなく候ふとて。関守の是まで酒を持たせて参られて候。」

シテ詞

「言語道断の事。やがて御目に懸らうずるにて候。」

狂言「シカく。」

シテ詞「実にく是も心得たり。人の情の盃に。浮けて心
を取らんとや。是に付きてもなほく人に。心な
くれそ呉織。」

地「怪しめらるな面々と。弁慶に諫められて。此山陰
の一宿に。さらりと円居して。所も山路の。菊の
酒を飲まうよ。」

シテ「おもしろや山水に。」

地「おもしろや山水に。盃を浮べては。流に引かるゝ
曲水の。手まづさへぎる袖ふれて。いざや舞を舞
はうよ。本より弁慶は三塔の遊僧。舞延年の時の
和歌。是なる山水の。落ちて巖に響くこそ。」

地「鳴るは滝の水。」

シテ詞「たべ酔ひて候ふ程に。先達御酌に参らうずるにて
候。」

ワキ詞「さらばたべ候ふべし。とても事に先達一さし御ま

ひ候へ。

シテ「承り候。

地「鳴るは滝の水。

シテ「鳴るは滝の水。

地「日は照るとも絶えずとうたり。絶えずとうたり。

とくく立てや手束弓の。心ゆるすな関守の人々。

暇申してさらばよとて。笈をおつ取り肩に打ち懸

け。虎の尾を履み毒蛇の口を。遁れたる心地して。

陸奥の国へぞ下りける。